「うつくし」の歴史的意味変遷について

本　明　　緑

１．はじめに

日本語における古語には、１つの語で複数の意味を持つ語が多く見られる。その中には、現代の意味とは少し違った意味で捉えられたり、現代とは反対の意味で捉えられたりする語もある。例えば、代表的なものに、「をかし」という古語が挙げられる。現代語では「おかしい」という、「普通とは違って笑いたくなるさま」を表す。しかし、古語では「趣深い」という意味を表わしていた。このような語がなぜ時代を経るにつれて、意味も変遷していったのか、筆者は疑問を抱いた。

本研究では、意味が変遷する語の事例研究として「うつくし」について調べることにするが、その理由は、筆者が１番初めに先の疑問を抱いた語であるからだ。「うつくし」という古語は、現代語では「美しい」という美を表す語であるが、古語になると「かわいい」という意味になるというのが一般的な見解である。一体どうして現代の意味に変遷していったのだろうか。「うつくし」については多くの先行研究があるが、それらを整理し、これまでの「うつくし」研究においてどこまで明らかになっているのかを明確にしたうえで、「うつくし」の意味が変化した時期やその背景について、奈良時代から江戸時代までの期間に着目し、見ていきたいと考える。

２．先行研究

２．１　「うつくし」の先行研究と意味分類

まず、「うつくし」の意味が一般的にどのように記述されているかを明らかにするため、『日本国語大辞典　第二版』『全文全訳古語辞典』『角川古語大辞典』『岩波古語辞典　補訂版』の４つの辞典を用いて、「うつくし」の意味を調べた。

また、本研究では、次の表１の先行研究も参考にした。「うつくし」には多くの先行研究が存在するが、今回は特に、「うつくし」の研究の基盤になっていると考えられる論文と複数の先行研究の成果がまとめられていると考えられる論文を選んだ。その参考にした先行研究の一覧が表１である。

表１　先行研究一覧

著者	論文名	誌名・書名	巻号	発行	発行年月
犬塚旦	源氏物語の「うつくし」と「らうたし」	平安文学研究	11	平安文学研究会	1953年1月
宮地敦子	「うつくし」の系譜	国語と国文学	48(8)	東京大学国語国文学会・至文堂	1971年8月
済田千恵子	美意識を表わす形容詞　―上代・中古における「うつくし」「うるはし」―	青山語文	2	青山学院大学日本文学会	1971年12月
江藤弘子	形容詞「うつくし」について　―意味の移り変わり―	大宰府国文	4		1985年3月
松尾聡	〈中古語雑感〉語義さぐりそぞろ言―「うつくし」の場合―	日本語学	4(11)	明治書院	1985年6月
松尾聡	栄花物語の「うつくし」の用例検討（一）	国語展望	71	尚学図書	1985年11月
松尾聡	栄花物語の「うつくし」の用例検討（二）	国語展望	72	尚学図書	1986年3月
中井彩子	「うつくし」の意味変化	国語語彙史の研究	21	国語語彙史研究会	2002年3月

本稿では、まず、先の４つの辞典で指摘されている「うつくし」の意味を整理したうえで、表１の先行研究も踏まえ、本研究における「うつくし」の意味区分（意味分類）を考えることにする。

以下の表２は、４つの辞典における「うつくし」の意味を整理したものである。

表２　辞典における「うつくし」の意味

	日本国語大辞典	全文全訳古語辞典	角川古語大辞典	岩波古語辞典　補訂版	本研究での意味分類
①	かわいい。いとしい。愛らしい。（肉親的な愛情）	かわいい。いとしい。愛らしい。	いとしい。（肉親的愛情）	かわいく思う。いとしい。	いとしい〈愛〉
②	愛らしく美しい。可憐である。（小さいものに対する愛情）		かれんなさま。かわいいさま。（小さいもの、いたいけなものに対す愛情）	かわいい。（小さいものに対する）	可憐である〈愛と美〉
③	美麗である。きれいだ。	きれいである。美しい。うるわしい。	麗しい。きれいだ。	きれいである。美しい。	きれいだ〈美〉
④	ちゃんとしている。きちんとしている。	立派である。見事だ。上手だ。	均整感。	見事である。	見事だ〈美と善〉
⑤	好意や態度、文章、音色が好ましい。				
⑥	新しい。新鮮である。				
⑦			すっかり。（残滓がない）	思い切りよく。きれいさっぱり。	

この表２の各辞典の意味と、表１の先行研究で指摘されていることをもとに、本研究では、「いとしい〈愛〉」「可憐である〈愛と美〉」「きれいだ〈美〉」「見事だ〈美と善〉」の四種類に「うつくし」の意味を区分したいと考える（表２の右端参照）。

なお、意味分類における、〈愛〉〈愛と美〉〈美〉〈美と善〉という表現は、宮地（1971）を参考にした。意味分類の欄にこれらの表現を追加したのは、今回設定した意味分類の、それぞれの意味の違いを明らかにしたかったからである。

また、〈善〉の意味については、宮地（1971）に詳しい記述がないため、本研究では「きち

んとしたものに対する評価」として〈善〉を使っている。〈善〉の意味は現在、関西方言として「汚れていない」「清潔だ」の意味で使われることがある。本研究の〈美と善〉には、「申し分ない」「ちゃんとしている」「完璧だ」の意味も含まれている。

さらに、本研究では、「うつくし」の意味分類において、表２の⑤⑥⑦の意味は加えなかった。本調査では、江戸時代までの「うつくし」の意味変化を検討することにしており、⑤⑥⑦の意味が使われているのは、先行研究によると明治時代以降だったからである。

２．２　先行研究における「うつくし」の意味と対象

次に、２－１の表１の先行研究が調査している作品と、筆者が「日本語歴史コーパス」を用い、奈良時代から江戸時代までの「うつくし」の用例が確認できた作品において、先行研究の研究状況を意味や対象に着目してまとめる[注1]。その結果が表３～表６である。ここで、「日本語歴史コーパス」に用例のある作品を示したのは、用例が見られる作品に対し、どの程度先行研究が言及しているかを明らかにしたかったからである。そのため、表３～表６では先行研究において言及されていない作品も含まれている。なお、本稿では、各作品は推定されるおおよその成立年代順に並べている。

以上のことにより、「うつくし」には多くの先行研究があるが、これまでの「うつくし」研究において、どこまでが明らかになっているのかを明確にしたいと考える。なお、以下では、先行研究の状況を表にしているが、その理由は、複数の先行研究が指摘し「うつくし」の意味として定着していると考えられるものと、そうではないものとを視覚的に示し、その両者をともに明らかにしたいと考えたからである。

２．２．１　先行研究における作品別の「うつくし」の意味

まずは、表１で挙げた各先行研究において、「うつくし」がどの時代に（どの作品に）、どのような意味で用いられていると指摘されているのかを検討する。その結果が表３である。

表３からは、例えば、奈良時代の『万葉集』において、宮地（1971）と江藤（1985）は「いとしい〈愛〉」の意味で用いられる「うつくし」があると指摘していることが分かる。

なお、表３～表６の松尾（1985ｂ）には「栄花物語の「うつくし」の用例検討（一）」と「栄花物語の「うつくし」の用例検討（二）」の両方を含んでいる。

また、表３の「うつくし」の意味分類の最後に「あざやか」があるが、これは江藤（1985）が示した意味である。この「あざやか」は、今回設定した意味分類のどれにも当てはまらないと考えたため、別に見出しとして新たに作成した。

表３　先行研究における作品別の「うつくし」の意味

時代	作品名	意味分類				
		いとしい〈愛〉	可憐である〈愛と美〉	きれいだ〈美〉	見事だ〈美と善〉	あざやか
奈良	万葉集	宮地(1971) 江藤(1985)				
平安	竹取物語	江藤(1985)				
	伊勢物語					
	土佐日記	済田(1971)				
	大和物語					
	蜻蛉日記			済田(1971) 江藤(1985)		
	宇津保物語					
	落窪物語					
	枕草子	済田(1971) 江藤(1985)	済田(1971) 宮地(1971) 江藤(1985)	江藤(1985)		
	拾遺和歌集	宮地(1971)				
	和泉式部日記					
	源氏物語	済田(1971) 宮地(1971) 松尾(1985a)	犬塚(1953) 済田(1971) 宮地(1971) 松尾(1985a)	済田(1971)	宮地(1971)	
	紫式部日記		宮地(1971)	済田(1971)		
	栄花物語	宮地(1971)	宮地(1971) 松尾(1985b)			
	浜松中納言物語		宮地(1971)	済田(1971)		
	夜の寝覚	宮地(1971)	宮地(1971)			
	堤中納言物語			済田(1971)		
	更級日記					
	狭衣物語		宮地(1971)			
	讃岐典侍日記					
	大鏡					
鎌倉	今昔物語集					
	今鏡			宮地(1971)	宮地(1971)	
	健寿御前日記			宮地(1971)		
	宇治拾遺物語		江藤(1985)	江藤(1985)		江藤(1985)
	建礼門院右京大夫集					
	十訓抄					
	古今著聞集			宮地(1971)		
	延慶本平家物語	江藤(1985)	宮地(1971)	宮地(1971) 江藤(1985)		
	夫木和歌抄	宮地(1971)				
	徒然草					
	とはずがたり					
室町	増鏡			宮地(1971)		
	花鏡			宮地(1971)		
	正徹物語			宮地(1971)	宮地(1971)	
	虎明本狂言集					
室町～江戸	御伽草子			宮地(1971)		
江戸	三体詩絶句抄			宮地(1971)		
	中華若木詩抄			宮地(1971)		
	洒落本大成					

※『万葉集』における江藤（1985）は、「うつくし」の中に「うつくしみ」も含んでいる。

２．２．２　先行研究における作品別の「うつくし」の対象

次に、同じく表１で挙げた各先行研究において、「うつくし」がどのような対象に用いられていると指摘されているのかを見ていく。表４～表６は、各作品で「うつくし」が対象としているものをまとめた表である。ただし、対象は、「人物―直接的なもの（表４）」「人物―間接的なもの（表５）」「人物以外のもの（表６）」の３つに分けている。この区分については、済田（1971）を参考にした。

表４の「人物―直接的なもの」には、人物の容姿や行動・態度について「うつくし」が使われているものを振り分けている。人物は、「男性」「女性」「児」のように、性別と年齢とに分けている。これは、用例中の男女が分かるような表現（「男」「女」など）で「男性」「女性」の区別を行い、「児」は、済田（1971）に従い15歳以下とした。「児」の性別は区別していない。また、「家族（夫婦・妻子）」の項目もあるが、これは血縁関係にある者同士の間で「うつくし」が使われている場合である。

表５の「人物―間接的なもの」には、人物の「心・精神」や「髪」、「衣装」といった、人物に関連するものの、人物そのものに対しては「うつくし」が使われていないものを整理している。

表６の「人物以外のもの」には、「自然」や「色」、「動物」など、人物とは関係ないものに「うつくし」が使われている場合に振り分けている。

また、表４～表６中の【　】内の数字は、「うつくし」が登場した回数を表している。ただし、回数が示されている先行研究のみ表示しているため、先行研究によっては、数字が書かれていないものもある。

表４　先行研究における作品別の「うつくし」の対象（人物―直接的なもの）

時代	作品名	対象（人物―直接的なもの）			
		男性（容姿態度）	女性（容姿態度）	児（容姿態度）	家族（夫婦・妻子）
奈良	万葉集		宮地(1971) 済田(1971)【2】 江藤(1985)【1】	宮地(1971) 江藤(1985)【1】	江藤(1985)【19】
平安	竹取物語			江藤(1985)【4】 中井(2002)	
	伊勢物語				
	土佐日記		済田(1971)【1】		
	大和物語				
	蜻蛉日記				江藤(1985)【1】
	宇津保物語			中井(2002)	
	落窪物語		済田(1971)【3】	済田(1971)【2】	
	枕草子			済田(1971)【11】 宮地(1971) 中井(2002)	
	拾遺和歌集				
	和泉式部日記				
	源氏物語	中井(2002)	犬塚(1953) 松尾(1985a) 中井(2002)	犬塚(1953) 宮地(1971) 松尾(1985a)	
	紫式部日記				
	栄花物語		松尾(1985b)【2】	松尾(1985b)	
	浜松中納言物語	済田(1971)【2】	済田(1971)【8】	済田(1971)【2】	
	夜の寝覚			宮地(1971)	
	堤中納言物語		済田(1971)【1】	済田(1971)【2】	
	更級日記		済田(1971)【1】		
	狭衣物語		中井(2002)		
	讃岐典侍日記				
	大鏡				
鎌倉	今昔物語集				
	今鏡				
	健寿御前日記				
	宇治拾遺物語		江藤(1985)	江藤(1985)	
	建礼門院右京大夫集				
	十訓抄				
	古今著聞集	宮地(1971)			
	延慶本平家物語		江藤(1985)		
	夫木和歌抄				
	徒然草				
	とはずがたり				
室町	増鏡				
	花鏡				
	正徹物語				
	虎明本狂言集				
室町～江戸	御伽草子				
江戸	三体詩絶句抄				
	中華若木詩抄				
	洒落本大成				

※『万葉集』における江藤（1985）は、「うつくし」の中に「うつくしみ」も含んでいる。

表５　先行研究における作品別の「うつくし」の対象（人物―間接的なもの）

時代	作品名	対象（人物―間接的なもの）				
		心・精神	髪	衣装	音楽（声）	筆跡・冊子・詩
奈良	万葉集					
平安	竹取物語	済田(1971)【1】				
	伊勢物語	済田(1971)【1】				
	土佐日記					
	大和物語					
	蜻蛉日記					
	宇津保物語					
	落窪物語	済田(1971)【1】			済田(1971)【1】	
	枕草子					
	拾遺和歌集					
	和泉式部日記					
	源氏物語		中井(2002)			宮地(1971)
	紫式部日記		済田(1971)【1】		済田(1971)【1】	
	栄花物語		松尾(1985b)【9】	松尾(1985b)【1】	松尾(1985b)【1】	松尾(1985b)
	浜松中納言物語					
	夜の寝覚					
	堤中納言物語		済田(1971)【1】		済田(1971)【1】	
	更級日記					
	狭衣物語				宮地(1971)	
	讃岐典侍日記					
	大鏡					
鎌倉	今昔物語集					
	今鏡				宮地(1971)	
	健寿御前日記			宮地(1971)		
	宇治拾遺物語					
	建礼門院右京大夫集					
	十訓抄					
	古今著聞集					
	延慶本平家物語			江藤(1985)		江藤(1985)
	夫木和歌抄					
	徒然草					
	とはずがたり					
室町	増鏡			宮地(1971)		
	花鏡				宮地(1971)	
	正徹物語					宮地(1971)
	虎明本狂言集					
室町～江戸	御伽草子			宮地(1971)		
江戸	三体詩絶句抄					宮地(1971)
	中華若木詩抄					
	洒落本大成					

※『今鏡』における宮地（1971）の「音楽（声）」は、音楽と男性の声の両方を含んでいる。

表６　先行研究における作品別の「うつくし」の対象（人物以外のもの）

時代	作品名	対象(人物以外のもの)					
		住居・調度・設備	儀式	自然	色・絵柄	動物	その他
奈良	万葉集						
平安	竹取物語						
	伊勢物語						
	土佐日記						
	大和物語						
	蜻蛉日記						
	宇津保物語						
	落窪物語						
	枕草子			宮地(1971) 江藤(1985) 中井(2002)		宮地(1971)	済田(1971)【3】
	拾遺和歌集						
	和泉式部日記						
	源氏物語	松尾(1985a)【1】				宮地(1971) 松尾(1985a)【2】	宮地(1971) 松尾(1985a)【1】
	紫式部日記						
	栄花物語	松尾(1985b)【1】			中井(2002)		宮地(1971) 松尾(1985b)【4】
	浜松中納言物語						
	夜の寝覚						
	堤中納言物語						
	更級日記						
	狭衣物語						宮地(1971)
	讃岐典侍日記				中井(2002)		
	大鏡						
鎌倉	今昔物語集						
	今鏡						
	健寿御前日記			宮地(1971)			
	宇治拾遺物語						
	建礼門院右京大夫集						
	十訓抄						
	古今著聞集						
	延慶本平家物語				宮地(1971)		江藤(1985)
	夫木和歌抄						
	徒然草						
	とはずがたり						
室町	増鏡						
	花鏡						
	正徹物語						
	虎明本狂言集						
室町～江戸	御伽草子	宮地(1971)		宮地(1971)			宮地(1971)
江戸	三体詩絶句抄			宮地(1971)			
	中華若木詩抄						
	洒落本大成						

※その他に含まれるのは、「台」「皿」「箸の台の洲浜」「車」「宿世」「玉」「数珠」「白檀の仏像」「唐鞍」などである。

以上のように、作品別に「うつくし」の意味と対象を見てきた。しかし、作品別ではなく、上代（奈良時代に相当）・中古（平安時代に相当）・中世（鎌倉・室町時代に相当）・近世（江戸時代に相当）という大きな時代区分を設定したうえで研究している先行研究も存在する。表７は、そのような先行研究をまとめたものである。

表７　先行研究における時代別の「うつくし」の意味

時代	意味分類				
	いとしい〈愛〉	可憐である〈愛と美〉	きれいだ〈美〉	見事だ〈美と善〉	あざやか
上代	済田（1971） 中井（2002）				
中古		中井（2002）			
中世		中井（2002）		宮地（1971）	
近世				宮地（1971）	

２．３　先行研究の記述の時代ごとの整理

以上から、２．１の４つの辞典の記述と表１の先行研究の指摘について、奈良時代から江戸時代までの時代ごとにまとめると、以下のようになる。

【奈良時代】

奈良時代の「うつくし」は、「いとしい〈愛〉」といった人に対する愛情を表す意味で用いられている。そのため、原義は、親が子を、また、夫婦が互いに、かわいく思い、情愛をそそぐ心持であると考えられている。

対象は、「夫婦（恋人）」「子」「孫」「母親」であり、肉親的関係を持った人間同士で使われている。しかし、肉親であっても目上と意識した人物には用いられなかった。「母親」に使った例はあるが、宮地（1971）によると、これは男盛りの防人が老母に対して使ったものであるため、母は子供同然であり、目上とは意識されていないということである。

つまり、主に自分が優位の立場から目下に抱く肉親的ないし肉体的な愛情のことであると考えられる。

【平安時代】

平安時代は、意味の変遷が見られる時代である。『竹取物語』では、かぐや姫の形容として「うつくし」が用いられているが、これは「可憐である〈愛と美〉」の意味であるとの指摘が見られる（奈良時代と同様「いとしい〈愛〉」であるとする見解もある）。以降、「可憐である〈愛と美〉」は『源氏物語』ひいては平安仮名文での中心的用法となる。さらに、済田（1971）や江藤（1985）は、『蜻蛉日記』になると「きれいだ〈美〉」の意味で「うつくし」が用いられていると指摘する。

一方、対象については、済田（1971）が、それまで「うつくし」の対象はほとんど人物であったが、『落窪物語』では「笛」に対して使っており、「うくつし」の表現範囲の拡大が見られると指摘している。また、複数の先行研究が『枕草子』になると、さらに対象の幅が広がり、動

物や自然物に対しても用いられるようになると指摘する。ただ、『枕草子』で女性と子供以外に用いられたのは「うつくしきもの」の章段のみである。さらに、ここでも弱小物に対して用いるという条件が見られる。この章段以外の対象は、全て子供であり、『源氏物語』『紫式部日記』においても、対象は女性と子供に限られているとする先行研究も見られる。『栄花物語』や『狭衣物語』で、物に用いられた例が見られるが、ごく稀である。そのうえ、宮地（1971）は物に用いられていると言っても、それは特例であり、若宮や姫宮自身を想像させるものであると述べている。

つまり平安時代になると、相手に愛情を持ちながらその美を愛でたり、「髪ざし」「手つき」といった人のさまをも修飾したりする、愛情と美的判断の入りまじった情意性と状態性を兼ねた用法が生じるのである。ただし、対象となるのは、身近に愛撫できるような人（特に女子供）や物などであり、奈良時代に見られた擁護的立場から幼いもの・弱いもの・小さいものをかわいいと眺める気持ちにまだ限定されている。

【鎌倉時代・室町時代】

鎌倉時代･室町時代については、江藤（1985）が、『宇治拾遺物語』において「きれいだ〈美〉」の意味で用いられているものが10例中７例存在するとしている。そのため、この段階で、「きれいだ〈美〉」という現在の意味が定着してきたのではないかと考えられる。『延慶本平家物語』においても同様であり、「美」の形容として「うつくし」が用いられている。

対象については、『健寿御前日記』で、「春の花々と妍を競う衣装」に「うつくし」が用いられているが、これは女性に対してではなく、「花と比較した衣装そのもの」を対象として「うつくし」が使われている。『延慶本平家物語』や『増鏡』においても、紅葉の色や花紅葉が対象になっている例が見られる。このことから、女子供を中心に使われていた「うつくし」は、「花」をきっかけに様々なものに使われるようになったと考えられる。他では、『今鏡』や『古今著聞集』に「成人男性の容姿や声」が対象となっている用例が見られ、室町時代の『花鏡』や『正徹物語』になると、「曲」や「文章」といった「人の造り出す芸術美」も対象となっている。

つまり、鎌倉時代・室町時代は、対象そのものに美を認めるようになり、「きれいだ〈美〉」という現在の意味が普及していったと考えられる。その結果、同時代の初期は女性や美女にたとえられる花といった匂いやかな美に限定されていたが、男性にも用いられるようになり（平安時代にも一部用例はある）、室町時代になると人間以外の自然美や人工美、きらびやかな美といったものにまで用いられるようになったのである。

【江戸時代】

室町時代から江戸時代にかけては、「きれいさっぱりとあとくされもなく、無くなったり、切れたり、別れたりする」という意味で用いられている例が見られる。これはこまやかな美しさの表現から派生した用法であるとされている。

また、対象については、『三体詩絶句抄』『中華若木詩抄』では、鎌倉･室町時代に続き、「人の造り出す芸術美」も対象となっている。さらに、『御伽草子』などでは、「うるはし」が対象としていた「貝」「玉」「孔雀の翼」といったきらびやかなものに対しても「うつくし」が使わ

れている。これまでは、対象の幅が広がっていっても、基本的に「目の前に見える小さいもの」に対して「うつくし」が用いられていた。しかし、『御伽草子』や『三体詩絶句抄』になると、「雲」や「邸宅」といった、遠くの大きなものにまでも使われるようになった。

また、江戸時代にはさまざまな語形も生み出されており、例として、転訛形「うっつい」「うっつく」、形容動詞「うつく」などがある。

以上のことから先行研究を概観すると、奈良時代から平安時代にかけての「うつくし」の変遷については、その要因も含めて詳細に書かれていたが、鎌倉時代～江戸時代における調査や考察はそれまでの時代に比べて少ない。そのため、「うつくし」の変遷についてさらなる解明を行うには、鎌倉時代以降の調査が必要であると考え、本稿ではこの点を検討する。

３．調査

先行研究によると、鎌倉時代には、「うつくし」の意味として、「きれいだ〈美〉」の意味が定着してきたとあるが、鎌倉時代以降「いとしい〈愛〉」や「可憐である〈愛と美〉」の意味は、どの程度使用されていたのだろうか。表３から推測できる部分もあるが、この点はまだはっきりしていない。さらに、「見事だ〈美と善〉」の意味も鎌倉時代から使用が見られるとされているが、具体的にはどのあたりから見られるようになったのだろうか。このような疑問を解決するため、以降では鎌倉時代から江戸時代における「うつくし」について、詳しく調査を行う。ただし、本稿では、明治時代になると「うつくし」の意味変化があまり顕著に見られないであろうと考えたため、今後の課題とし、調査しない。

３．１　調査の方法

調査には、「日本語歴史コーパス」を用いた。検索方法は、「短単位」かつ「語彙素読み　ウツクシイ」である。なお、形容動詞「うつくしげなり」や、名詞「うつくし」、「うつくしまま」の語幹として「うつくし」が使われているものは除いてある。

３．２　調査対象とする作品

調査対象とする作品は、鎌倉時代の『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『建礼門院右京大夫集』『十訓抄』『徒然草』『とはずがたり』の６作品、室町時代の『虎明本狂言集』の１作品、江戸時代の『洒落本大成』１作品、合計８作品である[注2]。

３．３　調査の観点

調査にあたって、「うつくし」の用例の分析観点として、「活用形」「評価主」「評価主の性別・年齢」「対象」「対象の性別・年齢」「現代語訳」「意味分類」「文の種類」「字形」の９項目を設けた。「評価主」は、「うつくし」と発言している人物ではなく、「うつくし」と感じた人物のことを指している。「対象」は、「うつくし」と表現されているものを指す。評価主や対象が人物の場合で、かつ、性別・年齢が分かる場合は、「評価主の性別・年齢」「対象の性別・年齢」の項目に記入している。「現代語訳」は、「日本語歴史コーパス」の底本に示された訳のことである。

「意味分類」は、本稿で設定した「いとしい〈愛〉」「可憐である〈愛と美〉「きれいだ〈美〉」「見事だ〈美と善〉」の四種類の意味のうち、どの意味で用いられたと判断したかを示す。「文の種類」は、「日本語歴史コーパス」の「本文種別」の項目を参考にし、「地文」「会話文」「会話文―韻文」「引用―会話指示」「表」「割書き」に分けてある。「字形」は、「うつくし」が文中で用いられている形を表している。

４．調査結果

以下では、３．２の調査対象とした作品ごとに、３．３の９項目の観点から行った調査結果を表８～表15で示す。作品ごとに、全用例の結果を表で示した後、一部の用例とその意味分類について紹介する。

なお、(1)～(16) の各用例の末尾の（　）内の記述は、各作品の表の「作品名」と対応しており、表の中のどの用例であるかを示したものである。

４．１　各作品における「うつくし」の調査結果

『今昔物語集』　全４例

表８　『今昔物語集』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
今昔物語集①	連用形	娘	女（10代？）	紅梅		きれいだ	きれいだ〈美〉	地文	媚キ
今昔物語集②	已然形	僧	男	虚空蔵菩薩	女（女人に化けている）	嬉しい	いとしい〈愛〉	会話文	媚ケレバ
今昔物語集③	連用形	助	女	慶子	女	心から慕う	可憐である〈愛と美〉	地文	媚ク
今昔物語集④	連用形	作者		人妻	女（30歳ぐらい）	美しい	きれいだ〈美〉	地文	美カリケリ

(1) 東ノ台ノ前ヘ近ク紅梅ヲ殖ヘテ、花ノ時ニハ、早旦ニ格子ヲ上ゲテ、只独リ此レヲ見ツヽ、他ノ心無ク此レヲ愛シケリ。夜ニ至ルマデ夜ニ至ルマデ媚キ匂ヲ目出デ、内ニ入ル事ヲセズ。　（今昔物語集①）

(2) 此ク気近ク御スルモ媚ケレバ、同クハ然様ニテ見聞エバヤ』ト思フヲ、　（今昔物語集②）

(1) は、「紅梅のきれいな色香を愛でつづけ」ということであり、「きれいだ〈美〉」の意味だと判断した。(2) は「女が妻となり、自分のそばに居てくれることが嬉しい」ということである。注釈では「いとしい、慕わしい」の意としており、それに従い「いとしい〈愛〉」とした。

『宇治拾遺物語』　全７例

表９　『宇治拾遺物語』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
宇治拾遺物語①	連体形	多気の大夫	男	大姫御前	女	美しい	きれいだ〈美〉	地文	美しき
宇治拾遺物語②	連用形	一条摂政殿	男	顔色	尼（女）（25.6ばかり）	美しい	きれいだ〈美〉	地文	美しくて
宇治拾遺物語③	連体形	一条摂政殿	男	色とりどりの着物	尼（女）（25.6ばかり）	素晴らしい	見事だ〈善と美〉	地文	美しき

宇治拾遺物語④	連用形	僧伽多	男	僧伽多の妻	女	愛らしい	可憐である〈愛と美〉	地文	美しく
宇治拾遺物語⑤	連用形	帝		僧伽多の妻	女	美しい	きれいだ〈美〉	地文	美し
宇治拾遺物語⑥	連用形	入道	男	童子	男	美しい	可憐である〈愛と美〉	会話文	美しかりつる
宇治拾遺物語⑦	連体形	童子	男	文殊菩薩（変身後）	女	美しい	きれいだ〈美〉	地文	美しき

(3) いみじう美しき衣の色々なるをなん着たりける。 (宇治拾遺物語③)

(4) この羅刹女の中に僧伽多が妻にてありし、僧伽多が家に来たりぬ。見しよりもなほいみじくめでたくなりて、いはん方なく美しく、僧伽多にいふやう、 (宇治拾遺物語④)

(3) は、「実にすばらしい色とりどりの着物を着ている」ということを表しており、「見事だ〈美と善〉」とした。(4) は、「鬼女の中で僧伽多の妻であった者が、前よりもなお一段ときれいになって、言いようもなく愛らしい様子である」ことを示している。そのため、「可憐である〈愛と美〉」にした。

『建礼門院右京大夫集』　全１例

表10 『建礼門院右京大夫集』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
建礼門院右京大夫集	連用形	藤原実宗	男	平維盛	男	美しい	きれいだ〈美〉	地文	うつくしく

(5) 色ことに見えて、警固の姿、まことに絵物語に言ひ立てたるやうにうつくしく見えしを、中将、 (建礼門院右京大夫集)

(5) は、「賀茂祭の警固の姿は、本当に絵物語にここぞとばかり書き立てているように美しく見えた」ということである。後の文で、評価者が対象の鮮やかな色の衣装を着た風姿を羨ましく思っている記述があるため、ここでは「うつくし」に〈善〉の意味を含めず、意味分類は「きれいだ〈美〉」にした。しかし、「絵物語に言ひ立てたるやうにうつくしく見えしを…」とあるため、「見事だ〈美と善〉」ともとれるかもしれない。

『十訓抄』　全２例

表11 『十訓抄』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
十訓抄①	連体形	作者	男？	字	尼	美しい	見事だ〈善と美〉	地文	うつくしき
十訓抄②	連用形	藤原盛重	男	髪	藤原佐実（男）	上手だ	見事だ〈善と美〉	地文	うつくしう

(6) 悦びて取りて去ぬと思ふほどに、やがて同じ寺に奉加する所へ行きて、筆を乞ひて、いとうつくしき手にて、この歌を書きて、 (十訓抄①)

(7) 恐れたるよししして、瓶子とりて、悪しく振舞へるやうにて、烏帽子を突き落しつ。誤したるつらつくりして、もてさわぎて見れば、めぐりをうつくしう編みて、烏帽子をきたるなり。 (十訓抄②)

(6) は、「まことに美しい字で歌を書き付け」ということであり、「見事だ〈美と善〉」の用例であると考えられる。(7) は、「まわりの髪を上手に編み上げて」ということであり、「見事だ〈美と善〉」の例と判断した。

『徒然草』　全１例

表12　『徒然草』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
徒然草	連体形	作者	男	器物		美しい	見事だ〈善と美〉	地文	うつくしき

(8) かの木の道のたくみの造れる、うつくしき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。
(徒然草)

(8) は、「あの木工の名人の作った美しい器物も、古風な姿のものが特別趣があると思われる」という意味であり、「をかし」とあることから、意味分類を「見事だ〈美と善〉」にしている。

『とはずがたり』　全５例

表13　『とはずがたり』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
とはずがたり①	已然形	後深草院	男	桜の色つや		美しい	きれいだ〈美〉	会話文	うつくしけれ
とはずがたり②	連用形	作者	女 (18～20)	反橋		かわいらしい	可憐である〈愛と美〉	地文	うつくしく
とはずがたり③	連用形	作者	女	絵		美しい	見事だ〈善と美〉	地文	うつくしう
とはずがたり④	連体形	作者	女	絵		美しい	見事だ〈善と美〉	地文	うつくしき
とはずがたり⑤	連体形	女房	女	絵		美しい	見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしき

(9) とおぼえしに、明け過ぎぬ先に帰り入らせたまひて、「桜は匂ひはうつくしけれども、枝もろく、折りやすき花にてある」など仰せありしぞ、　(とはずがたり①)

(10) 時継が定朝堂の前、二間が通りを賜はりて、反橋を遣水に小さく、うつくしく渡したるを、　(とはずがたり②)

(9) は「桜の色つやは美しいけれども」と述べられた後、桜の欠点が指摘されているため、「うつくし」に〈善〉の意味を含めず、「きれいだ〈美〉」の意味であると判断した。(10) は平時継が反橋を遣水に小さく、かわいらしく渡した場面であり、「可憐である〈愛と美〉」の意味で用いられていると考えられる。

『虎明本狂言集』　全32例

表14　『虎明本狂言集』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
虎明本狂言集①	連体形	浅鍋売		鍋			見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集②	連体形	若衆一		稚児				会話文	うつくしひ
虎明本狂言集③	連用形	年寄		稚児				会話文	うつくしひ
虎明本狂言集④	連体形	太郎冠者		上郎衆	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集⑤	連体形	太郎冠者		上郎衆	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑥	連体形	太郎冠者		上郎衆	女 (20歳ばかり)		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑦	連体形	餌刺		色鳥			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集⑧	連用形	罪人		地蔵			見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしう
虎明本狂言集⑨	連体形	鬼		女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑩	連体形	鬼		女	女 (夫・子持ち)		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑪	連体形	鬼		女房	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集⑫	連用形	夫	男	女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしう
虎明本狂言集⑬	連体形	男	男	手			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑭	連体形	金岡	男	上郎	女 (20歳ばかり)		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集⑮	連体形	妻	女	顔	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしく
虎明本狂言集⑯	連体形	妻	女	内裏上郎	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑰	連用形	妻	女	絵			見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしう
虎明本狂言集⑱	連体形	妻	女	小袖			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑲	連体形	出家		大児と小児			可憐である〈愛と美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集⑳	連体形	作者		僧	男		きれいだ〈美〉	引用 会話指示	うつくしひ
虎明本狂言集㉑	連体形	すっぱ		仏	女		見事だ〈善と美〉	引用 会話指示	うつくしひ
虎明本狂言集㉒	連体形	猿引		妻	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集㉓	連体形	盗人		子			可憐である〈愛と美〉	引用 会話指示	うつくしひ
虎明本狂言集㉔	連体形	盗人		子			いとしい〈愛〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集㉕	連体形	盗人		子			いとしい〈愛〉	会話文	うつくしひ
虎明本狂言集㉖	連体形	博労		牛			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集㉗	連用形	作者		貴女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしう
虎明本狂言集㉘	連体形	蛙の精		女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしき
虎明本狂言集㉙	連体形	鯰の精		竜女	女		きれいだ〈美〉	会話文	美度 (うつくしき)
虎明本狂言集㉚	連体形	作者		りうようこと（筆）			見事だ〈善と美〉	会話文 韻文	うつくしき
虎明本狂言集㉛	連用形	住持		後家			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしう
虎明本狂言集㉜	連体形			花子4	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしひ

(11)「さらハおくへ御とをり候へ「ミなござるか「何事で御ざる「そんじやうそこへ、うつくしひおちごさまのやどをとらせられたと申程に、ていしゆに申て、　(虎明本狂言集②)

(12) まづ〳〵さゝをまいれといふてな、かいでのやうなうつくしひ手にて、某が手をとつて、おくのまへいかるゝ程に、うれしうて、　(虎明本狂言集⑬)

(13)「れんがぬす人のことく、うちへまいつて、きる物をミ付、女にとらせうと云てとりのけ、子をミ付、うつくしひ子じやと云て、　(虎明本狂言集㉓)

（11）は対象が稚児という事実しか分からないため、意味の判断が付きにくく、どの意味にも捉えることができるため、意味分類の対象から除外した。（12）の「うつくし」は、「楓のような手」のことを表しており、「きれいだ〈美〉」の意味だと判断した。（13）の「うつくし」は、「着物を身に付けた子供の様子」を見て述べた会話文で使用されており、「可憐である〈愛と美〉」の意味だと判断した。

『洒落本大成』　全31例

表15　『洒落本大成』における調査結果

作品名	活用形	評価主	評価主の性別・年齢	対象	対象の性別・年齢	現代語訳	意味分類	文の種類	字形
洒落本大成①	終止形			ほう				表	うつくしい
洒落本大成②	終止形	遊女	女	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成③	連体形	客	男	匂い			見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしき
洒落本大成④	連体形	大尽	男	沢井の妻	女		きれいだ〈美〉	会話文	美しひ
洒落本大成⑤	連体形	坂見屋の後家	女	店			見事だ〈善と美〉	会話文	うつくしぬ
洒落本大成⑥	終止形	谷粋	男	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成⑦	終止形	谷粋	男	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくし
洒落本大成⑧	連体形	金七	男	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	美しい
洒落本大成⑨	連体形	金七	男	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成⑩	連用形	芸妓	女	芸妓（自分自身）	女		きれいだ〈美〉	地文	うつくしう
洒落本大成⑪	連体形	恋々斎	男	人間の身体			きれいだ〈美〉	会話文	美しき
洒落本大成⑫	連体形	半兵衛	男	鯉万	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成⑬	連用形	半兵衛	男	みつ	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしう
洒落本大成⑭	終止形	北里喜之介	男	名前			きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成⑮	連用形	艶次郎	男	みさ山	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしく
洒落本大成⑯	連用形			手際			見事だ〈善と美〉	割書き	うつくしく
洒落本大成⑰	連用形	艶次郎	男	子供			可憐である〈愛と美〉	会話文	うつくしく
洒落本大成⑱	連用形	客	男	顔	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしく
洒落本大成⑲	連体形	ひで	女	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしぬ
洒落本大成⑳	連体形	ひさ	女	遊女	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成㉑	連体形	辻	女	丈さん			見事だ〈善と美〉	会話文	柔和（きのうつくしい）
洒落本大成㉒	連用形	大星よしかね	男	遊女	女		きれいだ〈美〉	地文	うつくしう
洒落本大成㉓	終止形	菊枝	女	髪	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成㉔	連用形	作者		正三	女・18.19歳		可憐である〈愛と美〉	割書き	うつくしく
洒落本大成㉕	連体形	作者		お玉	女・15歳		きれいだ〈美〉	地文	うつくしき
洒落本大成㉖	連体形	ばば	女	娘	女		可憐である〈愛と美〉	会話文	美しい
洒落本大成㉗	連用形			春	女・12.3歳		可憐である〈愛と美〉	割書き	うつくしく
洒落本大成㉘	連体形	春野	女	今こまち	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成㉙	連体形	禿	女・子供	小町姫	女		きれいだ〈美〉	会話文	うつくしい
洒落本大成㉚	連体形	作者		お松	女・17歳		きれいだ〈美〉	割書き	うつくしき
洒落本大成㉛	連用形	作者		花車	女・37.8歳		きれいだ〈美〉	割書き	うつくしく

（14）えならぬ匂ひには心ときめくとはおもひしられたことにかた様のやうなうつくしきにはいよ〳〵の事じやさて又匂ひのものは人にやらぬといふのしのはらにほひは程なくかはるもの故に人と中わるく成ますといひます　（洒落本大成③）

(15) 木とおもふは至らぬ心から情に貴賤なき物と高尾がのこす詞もあり只美しき身を持ていきぢにいやしみなき様に儘ならぬ身をかこちくさ短気な　(洒落本大成⑪)

(16) 今夜ばかりは。とまつていんでも。高砂のゝ宮さ半鯉万も。今はうつくしいものは。ねいからないぞ住吉の。どろゆの。をどりなり庄木綿屋の娘は。どふしたいなア。
(洒落本大成⑫)

(14) は「えならぬ匂ひ」と同様の匂いについて話していることから、意味は「見事だ〈善と美〉」であると判断した。(15) は「至らぬ心から情に貴賤なき物と高尾がのこす詞もあり只美しき身を持て」という、阿弥陀の教えについて書かれてある文章である。内容から「穢れのない身体」を表しているため、意味分類は「きれいだ〈美〉」にした。(16) の対象である「鯉万」は、説明はないが、文脈からおそらく人間の女性である。「今はうつくしいものは」とあるため、「きれいだ〈美〉」の意が妥当であると考える。

４．２　「うつくし」の意味について

以上の４－１で示した、本稿で調査した鎌倉時代から江戸時代の各作品における「うつくし」の意味分類ごとの用例数についてまとめる。その結果が表16である。

表16　調査対象作品における「うつくし」の意味分類ごとの用例数

作品名	意味分類					合計
	いとしい〈愛〉	可憐である〈愛と美〉	きれいだ〈美〉	見事だ〈善と美〉	不明	
今昔物語集	1	1	2	0	0	4
宇治拾遺物語	0	2	4	1	0	7
建礼門院右京大夫集	0	0	1	0	0	1
十訓抄	0	0	0	2	0	2
徒然草	0	0	0	1	0	1
とはずがたり	0	1	1	3	0	5
虎明本狂言集	2	2	21	5	2	32
洒落本大成	0	4	22	4	1	31
計	3	10	51	16	3	83

表16を見ると、圧倒的に「きれいだ〈美〉」の意味で使われている例が多いことが分かる。このことから、鎌倉時代以降では「うつくし」の意味として「きれいだ〈美〉」が定着していることが分かる。しかし一方で、「いとしい〈愛〉」や「可憐である〈愛と美〉」といった、奈良時代や平安時代の中心的用法の意味でも、まだ用いられていることが明らかになった。

４．３　「うつくし」の対象について

続いて、対象に着目する。本稿で調査した各作品における対象を、２．２．２と同様に、「人物―直接的なもの」「人物―間接的なもの」「人物以外のもの」の３つに分け、考察を行う。

まず始めに、対象が「人物―直接的なもの」について検討する。その結果をまとめたものが表17である。

表17　調査対象作品における「うつくし」の対象と用例数（人物―直接的なもの）

作品名	対象（人物―直接的なもの）						合計
	男性（容姿態度）	女性（容姿態度）	児（容姿態度）	家族（夫婦・妻子）	性別なし	不明	
今昔物語集	0	3	0	0	0	0	3
宇治拾遺物語	0	4	1	1	0	0	6
建礼門院右京大夫集	1	0	0	0	0	0	1
十訓抄	0	0	0	0	0	0	0
徒然草	0	0	0	0	0	0	0
とはずがたり	1	0	0	0	0	0	1
虎明本狂言集	1	14	6	3	0	2	26
洒落本大成	0	21	2	0	1	1	25
計	3	42	9	4	1	3	62

表17を見ると、「女性（容姿態度）」が圧倒的に多いことが分かる。なお、２．２．２と同様に、この「女性（容姿態度）」は、15歳以上の女性のことである。15歳未満は、性別が分かっていても「児（容姿態度）」に加えている。

「男性」や「児」にも「うつくし」が使われているが、少数である。また、「男性」に使われている例は、男性そのものを「うつくし」としているのではなく、着飾った様子や、何か行動を起こしている様子に対して使われている。「家族（夫婦・妻子）」を対象としている例もあるが、これは夫が妻に対して使っているもののみである。

さらに、「評価主」と対象との関係についても着目した。すると、「女性（容姿態度）」を「うつくし」としている「評価主」は、男性の場合が多いという結果になった。これは、『虎明本狂言集』と『洒落本大成』において、「きれいだ〈美〉」の意味で「うつくし」が多用され、そこでの語り手（「評価主」）が男性である場合が多かったということにも起因するかもしれない。

続いて、「対象（人物―間接的なもの）」について、表18にまとめる。

表18　調査対象作品における「うつくし」の対象と用例数（人物―間接的なもの）

作品名	対象（人物―間接的なもの）						合計
	心・精神	髪	衣装	音楽（声）	筆跡・冊子・詩	手際	
今昔物語集	0	0	0	0	0	0	0
宇治拾遺物語	0	0	1	0	0	0	1
建礼門院右京大夫集	0	0	0	0	0	0	0
十訓抄	0	1	0	0	1	0	2
徒然草	0	0	0	0	0	0	0
とはずがたり	0	0	0	0	0	0	0
虎明本狂言集	0	0	1	0	0	0	1
洒落本大成	0	0	0	0	0	1	1
計	0	1	2	0	1	1	5

「うつくし」が「人物―間接的なもの」を対象としている例は少なく、わずか５例である。ただし、２．２．２の表５にはなかった「手際」が、『洒落本大成』の用例から項目に加わっている。これは、今現在使用する「うつくし」を内省すると、動作や仕草に対して「美しい」と用いることがある点に合致する。このような用法は、江戸時代から現れ始めたものであるか

もしれない。

最後に、「対象（人物以外のもの）」の考察を行う。表19である。

表19　調査対象作品における「うつくし」の対象と用例数（人物以外のもの）

作品名	対象（人物以外のもの）						合計
	住居・調度・設備	儀式	自然	色・絵柄	動物	その他	
今昔物語集	0	0	1	0	0	0	1
宇治拾遺物語	0	0	0	0	0	0	0
建礼門院右京大夫集	0	0	0	0	0	0	0
十訓抄	0	0	0	0	0	0	0
徒然草	0	0	0	0	0	1	1
とはずがたり	0	0	0	4	0	0	4
虎明本狂言集	0	0	0	1	2	3	6
洒落本大成	1	0	0	0	0	2	3
計	1	0	1	5	2	6	15

表19の「その他」には、「器物」「燗鍋」「地蔵」「仏」「匂い」「名前」を含めている。表17の「人物―直接的なもの」に比べると、表19「人物以外のもの」の用例は少ないものの、様々なものに対して「うつくし」が使われていることが分かる。また、15例中５例と「色・絵柄」に対して「うつくし」が使われていることが多いのは、「うつくし」の意味が「きれいだ〈美〉」として定着してきたことを裏付けるものであろう。

５．考察

次に、２．２で整理した先行研究の鎌倉時代以降の状況を抜き出したものと４で行った調査の結果とを、表に一つにまとめたうえで考察する。なお、表20～表23中の「作品名」に色がついているものが、本稿において調査対象とした作品である。また、表20～表23の〈　〉の中に入っている数字は、本稿の調査での「うつくし」の各作品における用例数である。

まず「うつくし」の意味についてまとめる。その結果が、表20である。

表20のように、先行研究と合わせてみても、鎌倉時代から江戸時代では「きれいだ〈美〉」の意味が定着していることが分かる。ただし、先行研究では、室町時代以降、「いとしい〈愛〉」と「可憐である〈愛と美〉」の意味が見られるかどうかが不明であったが、本稿の調査によって、少数であるが使われていることが分かった。

また、「見事だ〈美と善〉」の意味も、先行研究ではほとんど指摘されていなかったが、実際に調査をしてみると、一定数用いられていることが分かった。

「あざやか」の意味に関しては、江藤（1985）がどの用例からその意味を判断したのかが分からなかったが、本稿の調査ではそのような用法は見つからなかった。もしかすると、形容詞「うつくし」ではなく、形容動詞「うつくしげなり」や名詞「うつくしみ」などの意味である可能性も考えられる。

表20　先行研究と本稿での調査結果を合わせた「うつくし」の意味

時代	作品名	意味分類					
		いとしい〈愛〉	可憐である〈愛と美〉	きれいだ〈美〉	見事だ〈美と善〉	あざやか	不明
鎌倉	今昔物語集	〈1〉	〈1〉	〈2〉			
	今鏡			宮地(1971)	宮地(1971)		
	健寿御前日記			宮地(1971)			
	宇治拾遺物語		江藤(1985)〈2〉	江藤(1985)〈4〉	〈1〉	江藤(1985)	
	建礼門院右京大夫集			〈1〉			
	十訓抄				〈2〉		
	古今著聞集			宮地(1971)			
	延慶本平家物語	江藤(1985)	宮地(1971)	宮地(1971) 江藤(1985)			
	夫木和歌抄	宮地(1971)					
	徒然草				〈1〉		
	とはずがたり		〈1〉	〈1〉	〈3〉		
室町	増鏡			宮地(1971)			
	花鏡			宮地(1971)			
	正徹物語			宮地(1971)	宮地(1971)		
	虎明本狂言集	〈2〉	〈2〉	〈21〉	〈5〉		〈2〉
室町～江戸	御伽草子			宮地(1971)			
江戸	三体詩絶句抄			宮地(1971)			
	中華若木詩抄			宮地(1971)			
	洒落本大成		〈4〉	〈22〉	〈4〉		〈1〉

続いて、「うつくし」の対象についても意味と同じようにまとめる。表21は「人物―直接的なもの」、表22は「人物―間接的なもの」、表23は「人物以外のもの」について、先行研究の鎌倉時代以降の状況と本稿の調査結果をまとめたものである。

表21　先行研究と本稿での調査結果を合わせた「うつくし」の対象（人物―直接的なもの）

時代	作品名	対象（人物―直接的なもの）					
		男性（容姿態度）	女性（容姿態度）	児（容姿態度）	家族（夫婦・妻子）	性別なし	不明
鎌倉	今昔物語集		〈3〉				
	今鏡						
	健寿御前日記						
	宇治拾遺物語		江藤(1985)〈4〉	江藤(1985)〈1〉	〈1〉		
	建礼門院右京大夫集	〈1〉					
	十訓抄						
	古今著聞集	宮地(1971)					
	延慶本平家物語		江藤(1985)				
	夫木和歌抄						
	徒然草						
	とはずがたり	〈1〉					
室町	増鏡						
	花鏡						
	正徹物語						
	虎明本狂言集	〈1〉	〈14〉	〈6〉	〈3〉		〈2〉
室町～江戸	御伽草子						
江戸	三体詩絶句抄						
	中華若木詩抄						
	洒落本大成		〈21〉	〈2〉		〈1〉	〈1〉

表21をみると、本稿の調査結果から、「うつくし」は鎌倉や室町時代でも「家族（夫婦･妻子）」を対象とする用例があることが分かった。さらに、鎌倉時代～江戸時代においても、それまでの時代と同じように、「男性」よりも「女性」や「児」の容姿態度に対して「うつくし」が使われることのほうが非常に多いということも分かった。

表22　先行研究と本稿での調査結果を合わせた「うつくし」の対象（人物―間接的なもの）

時代	作品名	対象（人物―間接的なもの）					
		心・精神	髪	衣装	音楽（声）	筆跡・冊子・詩	手際
鎌倉	今昔物語集						
	今鏡				宮地(1971)		
	健寿御前日記			宮地(1971)			
	宇治拾遺物語			〈1〉			
	建礼門院右京大夫集						
	十訓抄		〈1〉			〈1〉	
	古今著聞集						
	延慶本平家物語			江藤(1985)		江藤(1985)	
	夫木和歌抄						
	徒然草						
	とはずがたり						
室町	増鏡			宮地(1971)			
	花鏡				宮地(1971)		
	正徹物語					宮地(1971)	
	虎明本狂言集			〈1〉			
室町～江戸	御伽草子						
江戸	三体詩絶句抄					宮地(1971)	
	中華若木詩抄						
	洒落本大成						〈1〉

表22を見ると、先行研究では鎌倉時代以降に「髪」に対して「うつくし」が使われているという指摘はなかったが、本稿の調査では、１例存在していた。また、平安時代では「心･精神」に対して「うつくし」が使われていたが、鎌倉～江戸時代では使われている用例が見当たらなかった。ただし、現代でも「美しい心」といった言い方は存在するため、「うつくし」の対象として平安時代以降も受け継がれていると考えてもおかしくはない。今回見当たらなかったのは、本調査で使用した作品の内容が関係しているのかもしれない。

表23　先行研究と本稿での調査結果を合わせた「うつくし」の対象（人物以外のもの）

時代	作品名	対象(人物以外のもの)					
		住居・調度・設備	儀式	自然	色・絵柄	動物	その他
鎌倉	今昔物語集			〈1〉			
	今鏡						
	健寿御前日記			宮地(1971)			
	宇治拾遺物語						
	建礼門院右京大夫集						
	十訓抄						
	古今著聞集						
	延慶本平家物語				宮地(1971)		江藤(1985)
	夫木和歌抄						
	徒然草						〈1〉
	とはずがたり				〈4〉		
室町	増鏡						
	花鏡						
	正徹物語						
	虎明本狂言集					〈2〉	〈3〉
室町～江戸	御伽草子	宮地(1971)		宮地(1971)			宮地(1971)
江戸	三体詩絶句抄			宮地(1971)	〈1〉		
	中華若木詩抄						
	洒落本大成	〈1〉					〈2〉

表23から、先行研究では、鎌倉時代以降「動物」に対して「うつくし」が使われているという指摘はなかったが、本調査では2例見つかった。また、「動物」の内訳としては、平安時代では「猫」に対してだけ使われていたが、室町時代の『虎明本狂言集』では鳥と牛に対して使用されている。このことから、平安時代ではかわいいものに対してだけ使われるものであったが、室町時代になると、「美」を取り入れたものに対しても使われるようになったことが分かる。

6．まとめと今後の課題

以上のように、本稿では、様々な「うつくし」の先行研究と「日本語歴史コーパス」での調査結果をもとに検討してきたが、最後に「うつくし」の意味変遷のきっかけについて考えたい。

先行研究を踏まえると、「うつくし」の意味が変化するきっかけになったのは、形容詞「らうたし」の登場であると考えられる。「かわいい」という意味を持つ「らうたし」との区別をつけるために、「うつくし」に美の概念が付与されていったのではないだろうか。その「うつくし」の〈美〉の概念は、形容詞「うるはし」から受け継がれたものであると考えられる。そして、この「うるはし」も、「らうたし」の登場により存在が希薄になり、「うつくし」に代替されていったのではないだろうか。このように考えると、「らうたし」と「うつくし」と「うるはし」の三者の関係性が気になるところである。

また、「うつくし」の対象の推移についても検討すると、花に「うつくし」が使われたことをきかっけとして、対象の幅が広がっていったと考えられる。女性から連想される「きれいなもの」、子供から連想される「小さいもの」という印象が花にあったからこそ、花という小さ

くてきれいなものに「うつくし」が使われたのではないだろうか。そして、「うるはし」の〈美〉の意味を吸収した「うつくし」は、対象として「きれいなもの」に重きを置くようになり、小さくなくても綺麗なものを対象として使われるようになったのだと考えられる。

このように、「うつくし」の意味の変遷に関しては、多くの先行研究が存在しており、ほぼ研究し尽くされている感がある。しかし、だからこそ様々な意見があり、その意見を精査する必要があった。また、鎌倉時代〜江戸時代における「うつくし」の使われ方の検討など、まだ解明の余地がある問題もあった。そこで本稿は、このような問題の解決の一端を担いたいと思い、取りくんだものである。

しかし、まだ今後の課題も残されている。具体的には、「うつくし」の意味が変遷していった背景として、上記で述べたような他の語の登場や衰退が深く関わっていることは間違いない。そのため、「うつくし」の意味の変容の背景をより詳細に解明するためには、「うつくし」が他の語とどのように関わり、影響されていったのかを見ていくことが必要だと考える。そこで今後は、「うつくし」との関係が深いとされている「らうたし」や「うるはし」、そして「うつくし」の派生語である形容動詞「うつくしげなり」や名詞「うつくしみ」、語幹としての用法などについて調べたいと考える。大枠は先行研究で明らかになってはいるが、毎年コーパスなどが充実してきている現在の研究状況を踏まえ、細部を詳細に検討することによって、さらなる「うつくし」の意味変遷における歴史的背景を追究していきたいと考える。

さらに、現代における「美しい」の用法についても研究したい。現代の若者は、それほど「美しい」という表現を使うことがなく、「美しい」という語は衰退してきていると筆者は感じている。はたして、現代語の「うつくし」はどのような状況なのであろうか。変化の推移の背景や、「美しい」の代わりにどのような語が代替語として使われているのかなども研究していきたい。

（注１）今回取り扱った先行研究の中には、「うつくし」の用例は載せているものの、どのような意味や対象で使われていると判断したのかが不明瞭なものがあった。そのような一部の用例については、今回の検討から除外している。

また、形容詞「うつくし」だけでなく、形容動詞「うつくしげなり」や名詞「うつくしみ」など、形容詞「うつくし」以外も調査に含めている先行研究があった。しかし、形容動詞や名詞には形容詞にはない性質がある可能性も考えられるため、今回は形容詞「うつくし」の用法に限定して研究を行いたいと考える。そのため、先行研究から形容詞以外の品詞の用例は、できる限り取り除いて検討している。ただし、形容詞以外であると分からなかったものは、先行研究の通りに整理した。

（注２）「日本語歴史コーパス」で検索可能な鎌倉時代から江戸時代までの作品をすべて検索した結果、『方丈記』『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』には、「うつくし」の用例がなかった。また、『天草版伊曽保物語』と『天草版平家物語』には「うつくし」の用例があったが、キリシタン資料であるため、本稿では調査対象に加えていない。

【参考文献】
犬塚旦（1953）「源氏物語の「うつくし」と「らうたし」」『平安文学研究』11、平安文学研究会
江藤弘子（1985）「形容詞「うつくし」について―意味の移り変わり―」『大宰府国文』4
大野晋・佐竹昭広・前田金五郎（1990）『岩波古語辞典　補訂版』岩波書店
済田千恵子（1971）「美意識を表わす形容詞―上代・中古における「うつくし」「うるはし」―」『青山語文』2、青山学院大学日本文学会
中井彩子（2002）「「うつくし」の意味変化」『国語語彙史の研究』21、国語語彙史研究会
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（1982-1999）『角川古語大辞典』角川書店
松尾聡（1985a）「〈中古語雑感〉語義さぐりそぞろ言―「うつくし」の場合―」『日本語学』4（11）、明治書院
松尾聡（1985b）「栄花物語の「うつくし」の用例検討（一）」『国語展望』71、尚学図書
松尾聡（1986）「栄花物語の「うつくし」の用例検討（二）」『国語展望』72、尚学図書
宮地敦子（1971）「「うつくし」の系譜」『国語と国文学』48（8）、東京大学国語国文学会・至文堂

【参考ＷＥＢ】
“うつく・し【美し・愛し】”『全文全訳古語辞典』（小学館）
JapanKnowledge Lib　https://japanknowledge.com/　（2018年6月12日）
“うつくし・い【美・愛】”『日本国語大辞典　第二版』（小学館）
JapanKnowledge Lib　https://japanknowledge.com/　（2018年6月12日）
国立国語研究所（2018）『日本語歴史コーパス』　https://chunagon.ninjal.ac.jp/　（2018年12月1日確認）

【使用文献】
浅見和彦（1997）新編日本古典文学全集『十訓抄』、小学館
大塚光信（2006）『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解』上、清文堂出版
大塚光信（2006）『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解』下、清文堂出版
久保田淳（1999）新編日本古典文学全集『建礼門院右京大夫集』『とはずがたり』、小学館
小林保治・増古和子（1996）新編日本古典文学全集『宇治拾遺物語』、小学館
神田秀夫・永積安明・安良岡康作（1995）新編日本古典文学全集『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』、小学館
馬淵和夫・国東文麿・稲垣泰一（1999-2002）新編日本古典文学全集『今昔物語集』、小学館
水野稔（1978-1988）『洒落本大成』2.3.6.7.13.14.16.18.24.26.27.29、中央公論社

（ほんみょう・みどり）